礼拝説教（2024 年９月 29 日）

説教者：中村信哉

ただ、おことばを下さい

ルカの福音書７章 1-10 節

はじめに

今日の聖書箇所には、イエス様が「百人隊長のしもべ」を癒されるという出来事が書かれています。その際、イエス様は百人隊長の信仰を見て、**「わたしはイスラエルのうちでも、これほどの信仰を見たことがありません」**と言って、驚かれました。この百人隊長は、異邦人でした。つまりユダヤ人ではありませんでした。ユダヤ人は、唯一のまことの神様を信じる民族です。そのユダヤ人の中にも見られない信仰が、異邦人の中に見られたことにイエス様は驚かれたのです。では、イエス様を驚かせるほどの信仰とは、一体どんな信仰なのでしょう

1. 百人隊長の人柄

まず、イエス様を驚かせた異邦人の百人隊長とは、どんな人だったのかを見ていきたいと思います。彼はある問題を抱えていました。それは、自分が重んじていた**「一人のしもべが、病気で死にかけていた」**というものです。この「しもべ」というのは、「奴隷」のことです。彼は百人隊長で、おそらくローマ帝国の軍隊を率いる隊長でした。彼は、百人の兵士を指揮する軍人で、**「カペナウム」**という町に駐屯していたのです。彼の下には、兵士のほかに、「しもべ」と呼ばれる「奴隷」もいたようです（７：８）。

彼は、ある一人の「奴隷」をとても「重んじていた」のです。ここでの「重んじる」という言葉は、「頼みにしている」「尊い」「高価な」という意味です。普通、主人と奴隷の関係は、絶対的な主従関係で、人格的には無視されがちです。しかし彼は７節で、**「私のしもべを癒してください」**とイエス様に願っていますが、ここでの「しもべ」は、「子ども」を意味する言葉が使われています。彼はこの「奴隷」を、自分の「子ども」のように見ていたのかもしれません。ですからこの「奴隷」が病気で死にかけていたなら、それを決して放ってはおけなかったのです。普通の主人と奴隷の関係なら、奴隷が病気になったら、役に立たない奴隷だと判断して、簡単に切り捨ててもおかしくないはずです。しかし彼は、そういう主人ではありませんでした。彼は、一人の奴隷を自分の子どものように扱い、その奴隷が病気で死にかけているとなれば、何としてでも助けようと考えたのです。

彼は、駐屯している町のユダヤ人たちとの関係も良好だったようです。普通、ユダヤ人は異邦人と関わりを持ちません。ユダヤ人は、自分たちこそ神様の民であり、異邦人は神様の律法を守らない「汚れた民」と見ていたからです。汚れた異邦人と関わると、自分も汚れると考えて、ユダヤ人は異邦人との関わりを避けていたのです。しかしこの百人隊長は違いました。彼は、**「ユダヤ人の長老たち」**からも深い信頼を得ていました。なぜなら、彼

は５節にあるように、ユダヤ人たちを愛し、ユダヤ人たちのために、彼らが神様を礼拝するための**「会堂を建ててくれた」**たからです。おそらく彼は、ユダヤ人たちが信じている唯一の真の神様を信じていたのでしょう。ですから、ユダヤ人たちを愛し、彼らを尊敬し、自分も彼らと同じ神様を礼拝したいと願って、会堂を建てたのでしょう。

彼は、社会的な立場を越えて、人間関係を持つ人であったように感じます。主人と奴隷、異邦人とユダヤ人、そういった社会的な立場を越えて人を愛することができる人であったように感じます。それはおそらく、唯一の真の神様を信じていたからではないでしょうか。旧約聖書の創世記にあるように、すべての人は「神様のかたち」に造られた尊い存在であるという人間理解を持っていたからではないでしょうか。ですから彼には、６節にあるように、**「友人たち」**も多かったのです。

しかし彼は、おそらく唯一の真の神様を信じていましたが、「割礼」を受けて、正式にユダヤ人たちの交わりに加わるまでには至っていなかったようです。異邦人であっても、「割礼」を受ければ、正式にユダヤ人たちの交わりに加わることができたのです。「割礼」とは、教会で言えば「洗礼」にあたります。その意味で彼は、教会で言う「求道者」に近かったと思います。「信仰」は持っているけれども、正式に「洗礼」は受けていないという人です。そのような「求道者」である彼が、自分の財産を献げて、ユダヤ人たちのために、そして自分自身のために、唯一の真の神様を礼拝する「会堂」まで建てたのです。彼の求道心というものは、本物であったと思います。

2. 百人隊長の信仰

では、イエス様を驚かせた彼の信仰というのは、具体的にどのようなものだったのでしょうか。彼が求道中の身でありながらも、自分の財産を献金して、「会堂」まで建てたことでしょうか。どうやら、そうではなかったようです。イエス様が見ていた彼の信仰は、もう少し別のところにあったようです。

① 徹底的なへりくだり

彼は、自分の子どものような奴隷が病気で死にかけていた時、イエス様の噂を耳にします。そして、**「ユダヤ人の長老たちを送って、自分のしもべを助けに来てくださいとお願いした」**のです。彼は、自分で直接、イエス様にお願いをしに行ったのではありません。彼は、ユダヤ人の長老たちを通して、イエス様にお願いしたのです。その理由について、彼は７節でこう言っています。**「私自身があなた様のもとに伺うのも、ふさわしいとは思いませんでした」**。彼はまだ、割礼を受けて正式にユダヤ人の交わりに加わったわけではない異邦人でした。彼は、ユダヤ人が異邦人を汚れた民と見ていて、関わりを避けていることを理解していました。彼は、町のユダヤ人たちからは深い信頼を得ていましたが、イエス様と関わるのは初めてです。ですから、もしかしたらイエス様は、異邦人である自分との関わりを嫌がるかもしれない、そのことを配慮して彼は、直接ではなく、ユダヤ人の長老たちを通して、イエス様にお願いしたのです。

イエス様は、ユダヤ人の長老たちの願いを聞き入れて、彼の家に向かいました。しかし彼は、イエス様が家の近くまで来られると、今度は「友人たち」を送って、こう言うのです。**「主よ、わざわざ、ご足労くださるには及びません。あなた様を、私のような者の家の屋根の下にお入れする資格はありません」**。彼は、イエス様がせっかく家に来てくださるというのに、イエス様を家の中に入れることを拒むのです。それは第一に、彼が異邦人であるからだと思います。先ほども言ったように、ユダヤ人であるイエス様に対する配慮からだと思います。しかし、それだけではないように思います。彼は、イエス様を「主よ」と呼んでいます。彼は、イエス様こそ、ユダヤ人たちも、また自分も、あの会堂で礼拝している唯一の真の神様だと信じていたのです。それは、天地万物と私たち人間を造り、それらに命を与え、今も天地万物と私たち人間の人生を導いておられる方として信じているということです。そのような偉大な神様であるイエス様を、自分の家の小さな屋根の下に押し込めることなどできないと言うのです。そして自分には、そんな「資格」はないと言うのです。

今日の聖書箇所に、「資格」とか「ふさわしい」という言葉が出てきます。ユダヤ人の長老たちは、４節で、**「この人は、あなたにそうしていただく資格のある人です」**と言いました。つまり彼には、イエス様の恵みを受けるだけの十分な資格があると考えたのです。その理由として彼は、ユダヤ人たちを愛し、多額の献金をして「会堂」まで建てたからです。その他にも、ユダヤ人の長老たちは彼を高く評価していたでしょう。彼は、社会的な立場を越えて、人間関係を持つ愛のある人だということも考慮したでしょう。また礼拝にも熱心に出席し、律法も学ぶ真面目な求道者であることも考慮したでしょう。それらを含めて、ユダヤ人の長老たちは、彼にはイエス様の恵みを受ける資格がある、イエス様に良くしていただく資格があると考えたのです。

しかし、彼自身は、自分自身は「資格はありません」「ふさわしいとは思いません」と答えています。彼は、自分自身の宗教的な行いは、イエス様の恵みを受ける資格としては、何の意味もないと考えていたのです。どんなに献金しても、どんなに礼拝に出席しても、どんなに聖書を学んでも、イエス様の恵みを受ける十分な資格を得るとは考えていなかったのです。もちろん、自分自身の人に対する態度、優しさや人柄や愛、そのようなものも、イエス様の恵みを受ける十分な理由にはならないと考えていたのです。

それに対してユダヤ人の長老たちは、彼にはイエス様の恵みを受ける資格があると考えたのです。なぜなら彼らには、人の「善行」が「良い行い」が、神様の恵みを受ける資格を得るという考え方が根底にあったからだと思います。しかしイエス様は、ユダヤ人たちの中には見られない信仰が、彼にはあると見て驚かれたのです。彼の信仰は、取引ではないのです。「これだけ良いことをしたから、恵みを下さい」というものではないのです。彼は、自分はイエス様の恵みを受けるに値しないことを認めていました。どんなに良い行いをしたとしても、それがイエス様の恵みや救いを受ける十分な理由にならない、自分の良い行いなど聖なる神様の前では、罪に汚れた、小さなものに過ぎないと考えて、自分を偉大なイエス様の前に徹底的に低くしたのです。

彼を通して教えられるのは、キリスト教の信仰とは、決して神様との取引ではないということです。良い行いをすれば恵まれる、良い生き方をすれば救われるというものではありません。自分の良い行いなど、救いに何の価値もない、自分の良い生き方など、イエス様の恵みを受ける十分な理由にならない、そのことを心から認めて、イエス様の前に徹底的にへりくだり、ただただイエス様の恵みを求めるものです。

② イエスのことばへの信頼

彼は、イエス様に家に来ていただいて、奴隷の上に手を置いて癒していただくことを拒みました。それは、自分には、イエス様にそのようにしていただく資格がないと考えたからです。しかし彼は、自分の子どものような奴隷を何とかして癒してもらいたいのです。そこで彼は、イエス様に**「ただ、おことばを下さい。そうして私のしもべを癒してください」**とお願いするのです。彼は「兵士」や「奴隷」の上に立つ軍人です。上に立つ者の「ことば」の「権威」を十分に知っていました。彼が兵士に命令すれば、兵士は必ず実行します。また彼が奴隷に命令すれば、奴隷は必ず実行します。彼は、上に立つ者の「ことば」には、権威と力があると日々、経験していたのです。そういう社会の中で、彼は生きていたのです。彼は、イエス様を天地万物と人間を造り、今も導いて治めておられる方と信じていました。ですから、そのイエス様の「ことば」にも、権威と力があると信じたのです。イエス様の「ことば」の前には、病気をも従い、自分の奴隷は癒やされると信じたのです。彼は、イエス様の「ことば」だけで十分だと信じたのです。そして、実際に、彼の奴隷はイエス様の「ことば」だけで癒されたと 10 節にあります。

イエス様が驚かれたのは、彼がイエス様の「ことば」を信頼したからです。「ことば」だけで十分と考えたからです。ユダヤ人たちは、「しるし」を求めました。つまり、イエス様の「奇跡」を求めたのです。しかし彼は、「奇跡」ではなく、「ことば」を求めたのです。キリスト教の信仰とは、イエス様の「ことば」を信頼する信仰です。イエス様の「ことば」に生かされていく信仰です。

<u>おわりに</u>

百人隊長は結局、イエス様を見ずに、イエス様に会わずに、イエス様の恵みを経験しました。彼はただ、イエス様の「ことば」だけを信じたのです。私たちも、イエス様を見たことはありません。イエス様に会ったこともありません。私たちは、イエス様の「ことば」を通して、イエス様を信じているのです。使徒ペテロは、このように言いました。**「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに踊っています。あなたがたが、信仰の結果であるたましいの救いを得ているからです」（Ⅰペテロ 1:8-9）**。目に見えないものを信じるのが、「信仰」です。イエス様の「ことば」だけで、人は救われ、言い尽くせない喜びに踊ることができるのです。キリスト教の信仰は、良い行いを天秤にかけて、神様と取引をするようなものではありません。神様の前に徹底的にへりくだり、「ことば」を信頼する信仰なのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは、良い行いや実績を誇り、目に見えるものを求めて生きています。どうか私たちが、神様の前に何が価値あるものかを深く考えさせてください。人の評価に身を任せて生きるのではなく、神様の前にどう生きるかを考えさせてください。私たちがただ、あなたの「ことば」を信頼し、あなたの「ことば」に生かされていくことができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。